

# 九州各県の出版事情

## Publishers in the Prefectures of Kyushu

田 中 薫

「出版産業」は東京の一極集中であると言っても過言ではない。また、「出版は東京の地場産業である」という日本出版学会の会員もいる。したがって、東京から遠く離れた地である九州の各県で、主要都市を中心に出版活動を行っている出版社はきわめて少ない。

そして印刷・製本という製作面でのハンディがあるほか、出来上がった出版物を、地方から全国の書店に向けて発送するという流通問題に関しても、条件的には不利である。

さらに出版活動を企業として成立させ、継続していくためには、慢性的な書き手不足の状態から脱し、確保し、さらに発掘し、養成していくことが不可欠であるという意味では、それらのこともまた大きなネックとなっている。

そこで、まず九州7県の各県における出版状況の現状について把握することとし、沖縄の現在についても、視野に入れて見てみたい。

そして、地方で出版活動を行うことに伴う問題点はどこにあるのかについても検討し、そのポイントをあぶりだしてみたい。

キーワード：九州と出版、九州の出版人、地方出版、沖縄の出版

### 目 次

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| I はじめに          | IV 九州各県の現在の出版状況 |
| II 明治以前の九州の出版状況 | V 沖縄の現状         |
| III 九州出身の近代の出版人 | VI おわりに         |

## I はじめに

「出版は東京の地場産業」という言葉がある。そのくらい、出版社及び出版関連産業そのものは、東京に一極集中して存在しているといつてよい。東京を除けば、その次に数多くの出版社があるのは、大阪と京都ぐらいのものだ。そして、第4位は神奈川だが、以下、その他の県では出版社の数はぐっと少なくなる。

では、地方では出版活動は全く行われていないのかといえば、そんなことはない。しかし、きわめて少ない。それは九州地区に限らず全国どこでも、共通して言えることだ。

そして九州地区も例外ではない。しかし、唯一例外といえる地域があるとすれば、それは沖縄かもしれない。沖縄にはとにかく、出版社の数が多し。

けれどもその実態については、別項でふれることにする。

そこで、「日本の出版界の全体像」から見ていくことにする。「日本の出版界」は、「出版ニュース」の「日本の出版統計」によれば、昨年、2004（平成16）年度の実績では、総売り上げ額が2兆3,481億203万円（前年比1.3%増）であったという。そして、7年間連続しての前年割れの状態から脱し、少し上向いたとしている。また出版社数は4,260社であり、書籍の出版点数は77,031点であった。<sup>(1)</sup>

しかし、その全体の数字の中で、九州地区の占めている比率はどのくらいなのかとなると、残念ながら不明というほかはない。それだけをまとめた統計の数字はなく、九州地区の各県で活動している出版社の全体像も完全には把握できない。まして、各社の年間発行点数も、個別の発行部数も正確には把握できないからだ。

しかも最近では、流行といってもよいほど無数の自費出版が、全国各地で活発に行われている。

しかしその実数も正確にはつかめない。したがってデータが不足しているというだけでなく、調査もできないため、正確な数字が把握できない。

そして九州地区には規模的に目立った活動をしている出版社は、きわめて少ない。しかし、「出版ニュース」によれば、全体の4,260社のうちで、年間に10点以上発行している上位985社の中に入っている九州・沖縄地区の出版社は9社ある。

その9社とは次に示す社であり、これは2004（平成16）年度の場合の記事によるが、16年度と15年度の2年分の数字によって序列が決められている。

その9社とは、福岡と沖縄にも本社がある教科書中心の閣文社が各56点と84点で284位、福岡の海鳥社が38点と39点で316位、鹿児島島の南方新社が27点と19点で450位、沖縄タイムス社が13点と12点で783位、高城書房（鹿児島）が13点と7点で807位、熊本日日新聞社が12点と14点で839位、弦書房（福岡）が12点と11点で841位、石風社（福岡）が12点と12点で850位、ボーダーインク（沖縄）が10点と12点で976位といったところだ。

2004年度の実績では、日本全国の出版社数は、全体の4,260社のうち78%を占める3,315社が東京に集中している。そして地方の出版物を全国の流通ルートにのせている地方・小出版流通センターの川上賢一氏によれば、「一度は取り引きしたことのある出版社は、延べ1000社以上あるが、中で常時取り引きがあるのは500社でいどである」と言っている。

しかし、これは最盛期の数字であり、近年はもっと減っているという。そして、この中には東京の小出版社も含まれている。したがってそのくらい、地方での出版活動というものは、東京に比べると数が少ないということになる。

地方・小出版流通センターは2005（平成17）年4月で、開業30周年を迎えた。その取り引き総数は、総契約総数延べ1,044社であったが、2004年度は前年比はマイナス38.8%となってい

る。それぐらい、減ってきているのである。

地方出版社には専業と兼業があるが、数の上では兼業が圧倒的であり、その主体は新聞社、放送局、印刷所、書店（新刊書店、古書店）、官公庁などである。

しかし、九州地区における専業出版社の出版活動が全くないというわけではない。とくに福岡には出版社の数も多く、すでにふれたように上位 985 社以内に入っているものが、福岡だけでも 3 社ある。そして、沖縄には、なぜか出版社の数がすごく多い。

そこで、2005（平成17）年の時点での、九州各県の出版状況に関して概括して把握し、データを整理しておきたいと考えた。

しかしその前に、「九州と出版」の歴史的なかわりについてふれ、過去の歴史から、関連のある部分をダイジェストして、まとめておくことから始めてみたい。

## II 明治以前の九州の出版状況

2005（平成17）年は1868（明治1）年の明治維新から138年がたった年にあたる。

また近代の出版活動は、「明治20年に東京書籍商組合が組織された」ことに始まるとされている。ただし「当初は組合員共通の利益のために共同行為をするのが目的」であり、組織自体が営業することはできなかった。しかしこれは、「その後の出版・販売業の発展に意義をもつものであった」と脇村義太郎は述べている。<sup>(2)</sup>

したがってこの章では便宜的に、それ以前の時代、つまり江戸時代を中心として、幕末から明治初期までの出版にかかわるトピックについて、まとめておくことにしたい。

それは、伊東マンショから本木昌造までのことであり、それぞれの業績について、簡単にまとめておくこととする。そして、その次に明治20年までの状況を、さらに明治の前半から戦前までの時代を、それぞれ一つのくくりとしてとらえ、とくに、九州出身の出版人をとりあげることによって、九州地区と出版活動との関係をあきらかにしてみたい。

### 1. 明治以前、伊東マンショから本木昌造まで

明治以前に「出版」にかかわりのあった九州地区の人物として特筆できるのは、伊東マンショの存在であろう。日向の都於郡城（現在の西都市）生まれのマンショは、1582（天正10）年に日本を出発した「天正少年使節」の一人としてドン・原・マルチノや千々石ミゲルらと共にローマへ行き、1585（天正13）年にローマ法王に無事謁見したあと、8年後の1590（天正18）年に日本へ帰ってきた。

その帰路、インドのゴアで合流したイエズス会の巡察使アレキサンドロ・バリニャーニと共に持ち帰ってきたのが、グーデンベルク型の活版印刷機（活字、器具一式）であった。そして、これを使ってキリスト教の書籍の印刷と普及をはかったので、島原半島の加津佐をはじめ天草、長

崎、京都などの各地で多くの「キリシタン版」が作られた。

したがって1591（天正19）年から1611（慶長16）年までの約20年間、キリスト教の宣教師によってもたらされた、西洋の活版印刷機と国字を使って作られた『天草本伊曾保物語』をはじめとする日本語、ラテン語、ポルトガル語による宗教、文学、語学に関する出版物を、キリシタン版と言っている。それらが最初に印刷された地は九州だったのである。

しかし、徳川家康による1612（慶長17）年の禁教令及び1614（慶長19）年の高山右近らのマニラ、マカオ追放により、活字も印刷機も、すべてがヨーロッパへ送り返されてしまう。

したがって、現存しているキリシタン版は数も少なく、わずかに三十数点という。

その後しばらくは、江戸時代には金属活字による活版印刷は行われず、幕末になって島津藩の島津成彬が江戸の木版師木村嘉平を呼んで鉛活字の鑄造を命じた例や、江戸での大鳥圭介の活字鑄造の例などがあるが、島津藩の場合は成彬の死と共に、実用化に至らず消えてしまう。

さらに江戸時代の末、長崎の本木昌造が和文活字を実用化したことによって、ようやく近代に入って行く。

本木昌造は1828（文政6）年、長崎生まれ。オランダ商館に出入りする通詞であったが、オランダ船から印刷機と活字を買い、さらに日本語の活字の実用化に尽力した功績によって、近代活版印刷の創始者として名高い。本木が作った号数活字はクジラ尺の寸法を基本にした明朝体5号活字を中心にして、大小の活字を作り体系化したものである。また、新塾活字鑄造所を創業し、活字の製造販売も手掛けた。

その後、事業は弟子の平野富二に受け継がれていく。

## 2. 平野富二と野村宗十郎

本木の業績を受け継いだのが平野富二である。平野は1846（弘化2）年、長崎県生まれ。はじめは本木の弟子となり、長崎新塾（街）活版製造所の経営を引き継ぎ、活字鑄造の標準化に成功した。その後、東京築地活版製造所を設立して初代社長に就任。明朝体による築地体をつくるなど、明治、大正、昭和の印刷界で主導的な役割を果たした。さらに造船所なども創設して、民間造船の先駆者となり、実業家としても大成した。

野村宗十郎は1857（安政4）年、長崎県生まれだが、本木昌造の新街私塾で洋学を学んだあと上京し、東京築地活版製造所に入社、和文ポイント活字を導入し、創始した功労者としてよく知られている。今でも最もポピュラーな活字の体系であり、パソコン時代になって「ポイント」は、ますますなじみのものとなった。

これは本木の号数活字に対して、欧米のルールを取り入れて体系化したものであり、1895（明治27）年にはじめて10ポイント活字を鑄造したとされ、1903（明治36）年から一般に登場した。これは72分の1インチを1ポイントとして基準とし、それを整数倍にして、大きさの体系を決めているものである。

### 3. 幕末の福岡の出版活動

本木たちが活躍する以前、幕末になると福岡藩では活発な、出版活動が行われている。出版するための資金の出資者が藩のものを「藩版」と呼ぶが、個人によるものは「私版」とか「私家版」とよばれている。九大教授中野三敏氏の研究では福岡藩版として出版されたという、「四書章句集註」「五経正文訓点」など13点の出版物の名前があげられている。

とくに本草学が専門だが世紀を越えたロングセラー「貝原養生訓」で知られる福岡藩の貝原益軒(1630～1714)の活動は有名である。しかし出版のためには、経済的には苦勞したようだと書かれている。<sup>(3)</sup>

### 4. 明治初期の九州出身の出版人

明治20年に、東京で書籍商組合が結成されるより以前、近代の初期の出版人の代表としてあげなければならないのは、鹿児島島の森有礼と大分の福沢諭吉だろう。さらに熊本出身には徳富蘇峰もいてそれらのすぐれた業績は欠かせない。

森有礼は1873(明治6)年鹿児島県生まれ。清国、イギリス公使などを歴任し、初代の文部大臣を務めたが、福沢諭吉、中村正直、西周らと明六社を興して、啓蒙活動を行い、その拠点として「明六雑誌」を刊行した。これは、わが国最初の啓蒙的評論、総合雑誌であった。

福沢諭吉は1834(天保4)年、大分県生まれ。実際は中津藩の大坂の蔵屋敷で生まれたようだが、大分生まれとしている資料が多い。1858(安政4)年に江戸に出て塾を開いた。これがのちの慶応義塾であるが、はじめは長崎で蘭学を学び、大坂に出て緒方洪庵の適塾に学んだ。さらに英語を独習し、幕府の遣欧使節に従って渡米した。その後の業績は著しく「学問のすゝめ」「西洋事情」など多数の著書がある。

また、自ら出版も手掛けてユニバーシティプレスの最初となった。さらに海賊版の横行に手を焼きコピーライトを「版權」と名付けて、検印を始めたのも福沢である。

次に特筆できるのは熊本出身の徳富蘇峰である。蘇峰は1863(文久3)年生まれ。熊本洋学校から同志社に入学したが中退。自由民権運動に参加し民友社を創業して、平民主義の「国民之友」を創刊して啓蒙活動を行い、さらに徳富廬花を始めとする著者の大ベストセラーを数多く出版するとともに、自らも言論活動を行った。「近世日本国民史」「蘇峰自伝」などの著書がある。

## Ⅲ 九州出身の近代の出版人

鈴木徹造の『出版人物事典』には、とりあげられている出版人の中で、物故者総数636人中、44人もの九州・沖縄生まれの出版人が紹介されている。<sup>(4)</sup>

しかし、近代、現代に通じる出版社の経営という形をとったものとしては、鹿児島県薩摩川内市出身で改造社の創業者である山本實彦をあげておかななければならない。次に、大分県杵築市出

身で、主婦の友社を創業した石川武美をはじめ、アルスを起こした北原鐵雄とアトリエ社の北原義雄の北原兄弟の存在が目立っている。また、玄光社を創業した北原正雄も北原白秋の弟であり、兄弟の一人だ。

さらに、福岡県生まれの著名人には学習研究社の創業者の古岡秀人がいる。

そして鈴木『出版人物事典』には、1994(平成6)年6月、48歳で亡くなった1947(昭和22)年生まれの、葦書房の創業者久本三多までが入っている。

それらの鈴木が選んだ人物の中から、県別に多い順にまとめて並べてみると福岡17人、熊本9人、大分8人、長崎5人、鹿児島4人、沖縄1人ということになるが、残念ながら佐賀と宮崎出身者はいない。では、それぞれの人物名と主な業績、職名を紹介しておこう。

## 1. 福岡

池辺 傳(1891~1982)家の光協会の専務理事を経て東京出版販売(現、トーハン)社長

内田勇輔(1983~1986)日本出版配給を経て栗田出版販売常務取締役

菊竹大蔵(1983~1956)九州の書店の草分けともいわれた金文堂の社長

北原鐵雄(1887~1957)白秋が編集主宰したアルス創業者、詩人北原白秋の弟

北原義雄(1896~1985)アトリエ社創業者、美術雑誌「アトリエ」創刊、詩人北原白秋の弟

堺 利彦(1870~1933)売文社創業者。幸徳秋水らと平民社を興し「平民新聞」を創刊

式 正次(1894~1964)新聞之新聞社創業者。精華書房も創業

千倉 豊(1893~1953)日本評論社を経て千倉書房創業者

野田宇太郎(1909~1981)河出書房の『文芸』編集長

樋口 尚(1895~1988)金龍堂創業者。歌人としても活躍

久本三多(1947~1994)葦書房の創業者、福岡で活動した

藤実人華(1879~1963)近世医学社を創立、改題して診断と治療社創業者

古岡秀人(1908~1994)学習研究社創業者

宮原敏夫(1913~1987)合同出版社社長

本吉信雄(1896~1987)アルスを経て采文閣を創業、のちに婦人画報社社長

山本芳太(1899~1966)福岡金文堂社長

弥吉光長(1900~1996)日本出版学会常任理事、国立国会図書館司書監、出版研究家

## 2. 熊本

荒木精之(1907~1981)日本談義社創業者、「日本談義」を創刊、神風連の研究で知られる

小森田一記(1904~1988)中央公論社を経て世界評論社創業者。社会思想社社長として教養文庫を活発化した

徳富蘇峰(1863~1957)民友社創業者。蘆花の兄、自由民権運動に参加

長崎政次郎 (1895～1970) 熊本県で最初の書店長崎次郎書店社長  
西島九州男 (1898～1981) 岩波書店初代校正課長、今日の書籍校正の技術を確立した  
松前重義 (1901～1991) 東海大学出版会創設者、衆院選に6回当選  
光永星郎 (1886～1945) 日本広告と電通(電報通信社)創業者、出版広告で活躍  
美作太郎 (1903～1989) 日本評論社を経て新評論創業者  
本山彦一 (1853～1932) 東京日日新聞社(毎日新聞社の前身)社長、「サンデー毎日」を創刊

### 3. 大分

石川数雄 (1905～1982) 医師、主婦の友社社長、日本雑誌協会理事長など  
石川武美 (1887～1961) 主婦の友社創業者。日本出版配給社長も、第6回菊池寛賞受賞  
大柴四郎 (1856～1929) 医学出版の朝香屋創業者、東京書籍商組合組長も  
奈良静馬 (1886～1947) 講談社取締役、日本雑誌協会会長代行など  
新島章男 (1898～1962) 金港堂で修業し朋文堂創業者、山岳図書のパイオニア  
野依秀市 (1885～1968) 「三田商業界」を創刊し改題、実業之世界社創業者  
福沢諭吉 (1834～1901) 慶応義塾出版局創始者  
矢野龍溪 (1850～1931) 郵便報知新聞社社長を経て、敬業社、近事画報社創業者

### 4. 長崎

野村宗十郎 (1857～1961) 東京築地活版製造所社長  
平野富二 (1846～1892) 東京築地活版製造所創業者  
本木昌造 (1824～1875) 近代活版印刷の創始者、号数活字を体系化した  
陽 其二 (1838～1906) 本木昌造に学び『横浜毎日新聞』『穎才新誌』創刊者  
力富阡蔵 (1906～1985) 黎明書房創業者、古本屋から出版業へ

### 5. 鹿児島

小原国芳 (1887～1977) 玉川大学出版部創立者。「全人教育論」を説き、百科事典も出版  
得能良介 (1825～1883) 初代印刷局長、紙幣製造など印刷技術の革新に努めた  
森 有礼 (1847～1884) 明六社創立者  
山本實彦 (1885～1952) 改造社創業者

### 6. 沖縄

真栄城玄明 (1898～1981) 沖縄書店組合理事長、玄明書房社長、沖縄書店業界の発展に尽くした  
以上である。

次にこれらの九州出身の出版人の中から、主要な人物として山本實彦、北原兄弟、石川武美、

古岡秀人らを取りあげて、その業績を紹介しておきたい。

## 7. 九州出身の代表的出版人

①山本實彦は、1885（明治18）年、薩摩川内市生まれ。日大卒業後、新聞記者となり、やまと新聞特派員、東京毎日新聞社社長を経て、1919（大正8）年改造社を創業し、雑誌「改造」を創刊、「女性改造」「文芸」なども創刊する。賀川豊彦の「死線をこえて」などのベストセラーをきっかけに出版を手掛け、「現代日本文学全集」の刊行で円本の先駆者となった。戦後は政界にも打って出たが、労組問題などもからみ1955（昭和30）年に、改造社は姿を消した。2003（平成15）年に、薩摩川内市に川内まごころ文学館がオープンしたが、そこには改造社に残された有名作家の生原稿など、貴重な資料がたくさん収められている。

②北原鐵雄、義雄兄弟は、福岡県柳川生まれで北原白秋の弟たちである。鐵雄は白秋が編集主宰する芸術雑誌「アルス」を発行して文芸、美術、音楽などの出版に力を注いだ。その弟義雄はアルスに入社し、一時期、鐵雄と仕事をしたあと1924（大正13）年2月に次兄と袂を分けて独立。アトリエ社を設立し月刊美術雑誌「アトリエ」を創刊した。もう一人の弟正雄も一時期、鐵雄と共に働いたあと玄光社を創業し、現在も「コマーシャル・フォト」などの雑誌が発行されていて健在である。

③石川武美は1887（明治20）年、大分県杵築の生まれ。同文館書店を経て東京家政研究会を興して1916（大正5）年に主婦之友社を創業。自著『貯金のできる生活法』を出版する。その翌年の1917（大正6）年に「主婦之友」を創刊、すぐ役立つ婦人誌として新しい分野を開拓した。

④古岡秀人は1908（明治41）年、福岡県生まれ。学習研究社の創業者。炭坑内の給仕から小倉師範を卒業、上京して教育出版事業を志し、東京・大森で創業する。学年別の学習雑誌を完成させた。さらに教育映画、教育玩具部門にも進出し、「音と光と文字」を追求する情報化産業への道を目ざして総合教育産業を築きあげた。

さて現代は、ということで、次の項では沖縄を除く九州7県の現在の状況について、県別に出版社名をまとめておくことにしたい。

## IV 九州各県の現在の出版状況

ここでは、九州・沖縄地区8県の現在の出版状況を、出版社の存在という角度から、まとめておくこととする。九州地区の特徴は、まず福岡のレベルが高いということである。しかし、鹿児島にも活気がある出版社がいくつか存在している。

そして宮崎には活動中の社が4社ある。しかし佐賀、大分、熊本の3県にはすぐれた出版人による、きわだった活動というものは見られないが、長崎にはキリスト教関係の出版社がいくつか存在している。



その反面、なぜか沖縄には異常に出版社の数が多い。したがって、その理由についても考察してみることにはしたい。

日外アソシエーツの『地方・小出版事典』は1997(平成9)年に刊行されている。したがってデータが、今では少し古くなっているのが残念だが、その中で示されている個人、有限会社、株式会社等の中から、主宰者の顔が見える社についてとりあげ、それぞれの要点を紹介しておくことにしたい。<sup>(5)</sup>

そして次に、1. 福岡と鹿児島、2. 宮崎の出版社、3. 大分、熊本、佐賀、長崎という3つのグループにまとめて、それぞれの現状について、ふれてみたい。そして、沖縄については、その次の項であらためて紹介することとする。

## 1. 福岡と鹿児島

福岡には出版社が多い。2003(平成15)年に福岡市の福岡市文学館(赤煉瓦文化館)で開かれた「本を創るーフクオカ出版物語」展の図録及び、その他の資料によれば、次のような39社の名前があげられている。また鹿児島には南方新社、高城書房ほかオフィス未来などがある。但し、ここには書籍の出版だけではなく、雑誌社も含まれている。<sup>(6)</sup>

〔福岡〕 アイネック、葦書房、梓書院、あらき書店、海鳥社、北九州中国書店、九州旅行案内社、九州大学出版会、九州文化協会、弦書房、古雅書店、書肆侃侃房、創思社出版、不知火書房、キャドワークス、九州人、白鷗社、雀社、石風社、創言社、創研出版、中国書店、權歌書房、西日本新聞社事業局出版部、西日本文化協会、南風書房、のぶ工房、福岡部落史研究会、みずすまし舎、木星舎、花書院、夢畠、福岡県人権研究所、筑豊千人会、財界九州社、シティ情報ふくおか(プランニング秀巧社)、フクオカスタイル、月刊はかた、子づれDE CYA・CYA・CYA!である。さらにかつては、あきつ出版や、西日本図書館コンサルタント協会などという社もあった。

すでに情報誌の発行をやめた社も含まれているが、これらの中から活動が際立っている主要な出版社をとりあげて、その特徴について述べてみたい。かっこ内は主宰者名である。但し、主な概要は『地方・小出版事典』によっている。

①葦書房(久本福子)、久本三多が1970(昭和45)年に創業した総合出版社。山本作兵衛の『筑豊炭坑繪巻』などで全国から注目され、以後九州の自然、文化に焦点をあてて、九州の近代史発展に力を注いだ。

②弦書房(三原浩良)、三原が久本三多が死去したあとの葦書房を1994(平成6)年から約十年ひきつぎ、さらにその後社員8人とともに2002(平成14)年に独立して創業した。

③石風社(福元満治)、1981(昭和56)年に福元氏が創業。ペシャワール会の医師中村哲氏の『医者井戸を掘る』の出版などユニークな活動が目立つ。

④梓書院(田村明美)、1972(昭和47)年12月、「地方出版の向上の一翼を担いたい」との趣旨で

田村が創立した。「地方からの全国への発信基地としての役割」をめざし、定期刊行雑誌「季刊邪馬台国」を発行している。出版点数が多いが、北九州の創作文学や記録文学などを、多く扱っている。

⑤海鳥社（西俊明）、1985（昭和60）年12月、西俊明と別府大悟によって創業。「九州の豊かさに根ざし、時代の要請と生の営みに応える出版物を」という姿勢のもと、九州関連の歴史、民俗、芸術、自然をテーマにしたものを手掛け、石井忠の『漂着物事典』をはじめ『竹田青銅コレクション（全4巻）』『加藤典洋の発言（全3巻）』等の刊行により、竹田や加藤から広がる哲学、古代史関係などが多い。

⑥古雅書店（古賀知行）、1946（昭和21）年11月、大牟田市に古賀氏の父が昌知が創立した。自分の蔵書を売る古本屋から出発したが、「自由民権運動と九州地方」や三池、大牟田の歴史などのテーマが多い。

⑦不知火書房（米本慎一）、葦書房に5年間勤めた米本氏が退社して1988（昭和63）年1月から創業。自然や四季、ことばの問題などをテーマにしたものが多い。

⑧創言社（村上一朗）、1967（昭和42）年9月創業。九州出版文化研究会を始めた村上氏の個人出版がルーツ。宗教、哲学、思想書が中心。『キェルケゴール著作全集全15巻』などは圧巻。関連した文学書も多い。雑誌「思想のひろば」も刊行。

⑨創研出版（中村健一）、1988（昭和63）年7月創立。「筑後地方の文化創造、情報発信」の拠点をめざす。

以上が、福岡の主要出版社とその活動内容である。また、現在は活動はしていないが、ここに紹介した以外にも、たくさんの出版社が福岡にはあった。しかし、それらについては割愛する。次に鹿児島には、

〔鹿児島〕 著作社、史創社、春苑堂出版、文化ジャーナル鹿児島社、高城書房、南方新社、南日本新聞社、南日本新聞開発センター出版部、オフィス未来などがある。

①南方新社（南原祥隆）、1994（平成6）年4月の創業だが今、最も元気がよい出版社の一つといってよい。鹿児島や奄美大島の文化、自然などに焦点をあてた本を積極的に数多く出版している。

②史創社（長野裕二）、1988（昭和62）年7月創業、長野が自作の小説活動を展開する場として設立した。

③高城書房（寺尾政一郎）、1985（昭和60）年4月、印刷会社設立後、出版社も始めて鹿児島を中心とした小説などの出版物を多く世に出している。

## 2. 宮崎の出版社

宮崎には次の5社の名前がある。

〔宮崎〕 鉾脈社、本多企画、江南書房、宮日文化情報センター、三州文化社である。そのうちから次の4社の特徴を、紹介してみたい。

①鉾脈社 (川口敦己、道子)、宮崎市田代町にあり、月刊情報「タウンみやざき」という情報誌を発行し、書籍出版も多数手掛けている。社員数は40数名。タウン誌発行と書籍出版の双方を手掛けている地方の出版社としては、全国的にみても珍しい存在だ。1972 (昭和47)年に地方出版の自立を目指して、もともと雑誌「鉾脈」を発行していた川口夫妻が設立した。

書籍は、数多くの単行本のほか「みやざき 21世紀文庫」「ひむか新書」「鉾脈叢書」などのシリーズものも多数出版している。社是は「発掘、継承、創造」ということで、総合印刷出版業を目指している。

②本多企画 (本多寿)、東諸県郡高岡町にあり、詩集『果樹園』で第42回H氏賞受賞した詩人の本多寿氏が実際に果樹園の中にある社屋で主宰している。句集、歌集、小説集、写真集、画集など何でも手掛ける。

③江南書房 (二宮信)、1997 (平成9)年6月に創立。主に自費出版が多いが、郷土史関係の企画出版も手掛ける。

④宮日文化情報センター、宮崎日日新聞の別会社で出版事業部という形をとっている。企画出版と自費出版の双方を手掛けているが、「販売は著者へのお手伝い」の色彩が濃い。

### 3. 大分、熊本、佐賀、長崎

①熊本県：熊日情報文化センターの活動が目立つ。別に熊日出版という名称を使っているものも見られる。その他では、

〔熊本〕 天草文化社、熊本近世史の会、熊本近代史研究会、三章文庫、熊本出版文化会館、熊本日日新聞社情報文化センター、青潮社、熊本年鑑社、熊本子どもの本研究会などがある。

・青潮社 (高野和人)、印刷経営のかたわら1970 (昭和45)年から出版を。九州の歴史資料の復刻を中心とする九州を代表する出版社の一つ。西南戦争史料集をはじめ『日向地誌』『肥後国史』など、レベルが高く評価も高い。1984年にはサントリー地域文化賞を受賞し、第1回熊本日日新聞社出版文化賞なども受賞した。

②大分県：大分には次の7社がある。

〔大分〕 おおいたインフォメーションハウス、大分合同新聞文化センター、柏の森書房、広雅堂書店、双林社、ぶれいんぐ MUNE、みずき書房などである。

・広雅堂書店 (森猛)、1971 (昭和46)年6月創業。森氏は宮崎県の串間市出身だが、「豊後国」関係の出版物や遺跡に関連したものなどが多い。

③佐賀県：佐賀には佐賀新聞社以外には出版社名が見当たらない。

〔佐賀〕 佐賀新聞社出版部

④長崎県：長崎には次の4社があるが、名前からキリスト教関係の社が多いことがわかる。

〔長崎〕 芸文堂、聖母の騎士社、童話館、長崎文献社

・芸文堂（中村徳裕）、創業者飯田四郎（故人）が佐世保で創業。甥である中村氏が、1995（平成7）年に継承した。最近は電子出版などにも目を向けているが「松浦党」の歴史や「させば歴史散歩」といった地域の歴史散歩ものなどを得意としている。

## V 沖縄の現状

### 1. 沖縄の出版社

沖縄にはなぜか出版社がきわめて多い。50社という説と60数社という説があるが、もう一つ明確にはつかめない。「沖縄県産本日録'99」及び「第1回沖縄県産本フェア」「第7回沖縄県産本フェア」のパンフレット、その他の資料によれば、その名前は、

〔沖縄〕 アクアコーラル企画、あき書房、あけぼの出版、アドバイザー、いしだ文栄堂、おもろ出版、池宮商会、沖縄観光速報社、沖縄県地域史協議会、沖縄時事出版、沖縄タイムス社、沖縄教販、沖縄建設新聞、沖縄情報ドットネット、月刊沖縄社、カルチュア出版、郷土出版、週刊レキオ社、笑築、新星出版、天荒俳句会、サザンプレス、新報出版、創光出版、編集工房東洋企画、三浦クリエイティヴ、那覇出版社、琉球新報出版・事業部、ニライ社、日本気象協会沖縄支部、ひるぎ社、ボーダーインク、本処あまみ庵、榕樹書林、琉球新聞社、緑林堂書店、ロマン書房本店（Booksじのん）、若夏社、南山舎、ゆい出版、編集プロダクションあびい堂、APO（Art Produce Okinawa）、おきなわ情報、沖縄総合図書、沖縄パシフィックプレス社、沖縄マリン出版、閣文社、新沖縄フォーラム刊行会議、南方新社、バグハウス、沖縄県立博物館友の会、沖縄地域ネットワーク、沖縄図書販売、沖縄文化社、シナプス、南風社、南謡出版、むぎ社、民宿石垣島、西表島エコツーリズム協会、那覇市市民文化部歴史資料室、ゆめあーる（群羊社）、わらべ書房<sup>(7)</sup> <sup>(8)</sup> <sup>(9)</sup>

などである。ただし、これらの中には書籍の出版社だけではなく、定期刊行物を出している社も含まれている。

### 2. 沖縄の代表的な出版社

とりあげるべき出版社は多いが、中から次の4社を紹介しておきたい。

- ①あき書房（比嘉昭子）、1976（昭和51）年6月創業。琉球史等、沖縄をテーマにしたものが多い。
- ②あけぼの出版（古謝將嘉）、1962（昭和37）年10月創業。「沖縄の告発」及び基地関係の出版物が多い。
- ③ボーダーインク（宮城正勝）、1990（平成2）年創立。総勢6人。コンサートのプロデュースなどの活動はユニーク。編集長の新城和博氏が自ら書くなど、地元の若者文化のカリスマ的存在として有名。地方出版の定番だった戦争ものや自然、民俗、文化などの出版とは一線を画し、若者

たちの文化に焦点をあてている。この行き方は出版界の新しい風だといってもよい。雑誌「ワンダー」も発行。

④那覇出版社(多和田真重)、1966(昭和41)年創立。琉球の舞踊など、芸能関係を得意とし、郷土関係の出版と販売で郷土文化の向上に貢献している。

### 3. 多い理由は

沖縄にはもともと専門出版社が多かったという。そして1970年代には写真集とか事典のような高価な大型本を訪問販売で売っていて、よく売れた時期があったのである。

もう一つの理由は、沖縄はとにかく本にするに値するテーマが多いということ。中国の王朝に対しての冊封体制の中では琉球王国であった時代があることから、芸能をはじめ音楽、料理などあらゆる面で独自の南国的な文化があったことが大きい。したがって研究者や書き手も多い。

さらに太平洋戦争の激戦地であり、戦死者も多い。しかも、それ以来の基地問題があるなど、今日的なテーマも数多く抱えている。さらに鉦脈社の川口敦己氏の見解では、1971(昭和46)年に沖縄の施政権が返還され、沖縄県が発足するまで、中央からの物資があまり入らず、入ってきても出版物の場合は沖縄には馴染まないものが多かったので、「独自の出版文化が、より発達したのではないか」と言っている。

## VI おわりに

「はじめに」の項でもふれたように、出版産業は「東京の一極集中」が特徴であると言っても過言ではない。しかし、東京以外の全国のその他のエリアでも、出版活動はわずかながら行われている。またそれらの中の一地方である九州各県でも、出版活動そのものは活発である。

しかし地方で活動を継続していくためには、九州の場合は九州ならではの地元のテーマを掘り起こす作業が不可欠であるし、さらに書き手の発掘に努めるなど、出版社として継続していくためには手をつくすべき問題点は多い。そして、その最も大きな問題点は、「流通問題」への対応ということになるだろう。

県内への配本はどこの県でも教村書ルートなどの活用がみられる。

しかし新聞社のサービスセンターなどの場合は、独自の出版活動を重視してはいるが、「出版活動によって地域への貢献をする」というよりは、あくまで自社の「新聞購読者へのサービス」であるという要素が欠かせない。

かつて未来社の西谷能雄は「出版はこころざしの産業である」と言った。この言葉が示しているようにやはり出版は、出版する人の志が大切なのである。その意思によって出版物の傾向も、質も大きく左右される。したがって、出版社の組織としては個人、任意、宗教、同人、団体(社

団法人、財団法人)、有限会社、株式会社など種々あるが、やはり主宰者の意思によって活動の内容が大きく変わるということは多々ある。

1980年代には、まさに雨後のタケノコのように、全国各地に地方出版社が増えた時期もあったが、しかし、今では大きく衰退しているという。また、「出版社十年説」というものもあると聞く。資金面などの関係で、十年ぐらいは続けることができるが、そのあとの持続がむずかしい。しかも、やはり主宰者の志が持続できる期間にも限界があり、もともと「出版は創業者の一代限り」といった面が強い。

だから大組織の中で、たまたま人事異動でにわかに出版担当者になったからという程度の人の手によってでは、すぐれたものは生まれにくい。

しかし事業として継続させてゆくためには、「ビジネスとして成立させる」という側面はたしかに無視できない。けれども、大手のような派手な広告は打てず、全国への販売ルートの確保にも困難な面があるという悪条件は克服しにくい。そこで、多くの地方・小出版社は売り上げが安定的に確保できる自費出版を、数多く手掛けるということになる。

ただし利潤の追求が活動の第一の目的というのであれば、やはり東京で何か別の事業を行う方がよいであろうし、その場合は出版産業にこだわるというよりは、IT関連産業などいくらでも、もっと効率のよい新しいビジネスがたくさん考えられる。また、これからは、ますますそれらの要素が強くなっていくであろうと推測できる。

そうした中で、すでに電子出版が伸びつつある時代に、あえて古いメディアとされている「出版という形態」にこだわって、地方で活動を行って行く意味はどこにあるのだろうか。

その答えをさぐるためには、出版ならではのメディアを重視するという、「理由さがしの模索」が重要ということになる。

しかし、地域の活性化のためには、いつの時代であっても、地域の現状を見つめ直す作業が不可欠ともいえる。また、それは読者である地域住民が地元の出版物を通して、地域の特性を自覚することによってこそ可能となる。したがって、そうした意識が深まっているか否かは、出版活動が活発であるか否かによって占えるともいえる。つまり出版が地域の元気さを示す一つのバロメーターともなるのである。

もう一つは、「地方から外に出た人ほど、郷土を懐かしがる傾向が強いから、そういう人向けに本を創る」と言っている出版人もいるということだ。したがって「東京は新たな地方出版物の巨大市場になっている」という声もある。

つまり、出版する側も読者もそうした原点、基本認識を再確認することが常に求められているのだともいえる。けれども、その本質的な精神を見失わないかぎり、まだまだ地方での出版活動が減ってしまうということは、当分の間ないといえるのではないだろうか。

注、参考引用文献

- (1) 「日本の出版統計」、出版ニュース、2005年5月中下旬号
- (2) 脇村義太郎『東西書肆街考』岩波新書、1979年、pp.106
- (3) 「本を創るーフクオカ出版物語」展図録より、2003年
- (4) 鈴木徹造『出版人物事典』出版ニュース社、1996年
- (5) 『地方・小出版事典』日外アソシエーツ、1997年
- (6) 「本を創るーフクオカ出版物語」展図録より、2003年
- (7) 「沖縄県産本日録'99」沖縄県産本ネットワーク、1999年
- (8) 「第1回沖縄県産本フェア」出品目録より、沖縄県産本ネットワーク、1999年
- (9) 『あなたはこの本を知っていますか』No.21、地方・小出版流通センター、2005年
- (10) 「第7回沖縄県産本フェア」出品目録より、沖縄県産本ネットワーク、2005年
- (11) 塩澤実信『出版社大全』論創社、2003年